



IV
DIABLO
LORD OF HATRED

悪夢の翼の上で

ネイレル

短編小説

作: JONATHAN MABERRY

ストーリー
JONATHAN MABERRY

イラスト
LYNETTE WONG

編集
MEGAN WALKER

デザイン
SOPHIE ERB

アートディレクション
ALEX CRESWICK

ロア・ コンサルテーション
IAN LANDA-BEAVERS

クリエイティブ・ コンサルテーション
MATT BURNS, CASSIEL CHADWICK,
CHLOE FRABONI, ZAVEN HAROUTUNIAN,
NAZ HARTOONIAN, DAVID LOMELI

プロダクション
HANNAH MATTISON, BRIANNE MESSINA,
TAKAYUKI SHIMBO, JT TORREA, TRACY WANG



© 2026 Blizzard Entertainment, Inc. BlizzardとBlizzard Entertainmentのロゴは、米国またはその他の国におけるBlizzard Entertainment, Inc.の商標または登録商標です。

Published by Blizzard Entertainment.

この物語はフィクションです。名前、登場人物、場所、出来事は作者またはアーティストの想像の産物であるが、架空の存在として使われており、生死を問わず実在する人物、事業体、出来事、場所に類似するものがあったとしても、それはまったくの偶然です。Blizzard Entertainmentは作者または第三者のウェブサイトおよびそのコンテンツについて一切管理を行わず、それらに対する一切の責任も負いません。



今こそ、この神託者の女王の声に耳を傾けよ。現在、過去、そして未来を知るのが私の役目だ。

夢は眠れる精神の入口だ。眠れる精神は闇深き場所であり、窓を砕き、道を封鎖しても、真実の侵入を阻むことはできない。

夢の中で我々は計画し、希望を抱き、考え、信じる...そしてあらゆる葛藤を解決し、自らの秘密を全て解き明かした時、我々は目を覚ます。

見よ、万物がその信念に歓喜している。まるで夢を抱いた夢想家の旋律がその意思を顕現させるかのようだ。

だが、夢の中で真実が明らかになるわけではない。真実は、蜘蛛の巣が張る悪夢の廊下で発見の時を待ちわびているのだ。

しかし、それには代償が伴う。

そう、大きな代償が...





ネイレル

ネイレルはその日、長い距離を歩き、夢の中でもさらに歩き続けた。希望は普段着のようなものだったが、疑いがその糸を引っ張り始めていた。旅の最中も、寝ても起きても、彼女の心は休まらなかった。どの道を選択しても、光のない時にだけ影が落ちる、太陽の輝く緑の平原にはたどり着けなかった。

歩みを進めるごとに、真実から遠ざかるような気がしていた。そして目的からも。

メフィストが復活しようとしている。それだけは確かだった。その力が日に日に高まり、影響が強くなるにつれ、ネイレルは自分の力の衰えを感じ、方向性と目的を失い始めていた。

希望もそうだった。

彼女は旅を始めてから、より多くを知り、真実の探求者にすら明かされていない隠された謎を紐解くために、自らを奮い立たせて知識を増やし続けた。その知識はあらゆる戦いで活かされたが、最近では疑いが彼女の精神を蝕んでいた。

彼女は夜を明かすために、破碎山脈の狭い道に野営地を設営することにした。首に巻きつけた毛皮を荒涼とした風に引っ張られながら、炎を上げる焚き火の側に腰を下ろした。寒い日が続き、いくら重ね着をしても、空気は上着と下着の隙間に入り込んで彼女の肌に噛みついた。生物の温もり求める冷たい亡霊のように、風は闇の声となって彼女の周りで悲鳴を上げた。

毎晩のようにそれが続いた。

ネイレルにとっては、どの野営地も、睡眠も、夜も、夜明けも、目的を持たない生命の木霊のような存在になっていた。彼女は焚き火を見つめながら絶望に喉を詰まらせた。これだけ長い道のりの先に何が待っているのだろうか？戦いと愛する者たち失った代償に何を得られるのだろうか？

「もう手遅れなの？」と彼女は横になって震えながら夜に問いかけた。冷たい風は絶え間なく攻撃を仕掛け、彼女はその犠牲者だった。体から暖かさが失われるにつれ、自信と楽観的な考えも同じように凍結して砕け散り、ひと欠片ずつ邪悪で無慈悲な

「私は戦士じゃない」
と彼女は主張した。
「私は学者よ」

闇の中に吹き飛ばされていった。「これは私への罰なの？正義のために戦っていると信じ、ただ人生を無駄にしてるだけの私への戒め？」

炎の先にある割れた岩の上に1羽のカラスがとまっていた。思慮深そうな老いた目をしていたが、彼女の疑問には答えてくれなかった。

ネイレルは目をつむり、強くまぶたを閉ざした。もしも彼女が、母親から授かった名前のようにカササギだったら。もしも、このカラスと共通の言語で話すことができれば。秘密を明かして彼女を助けてくれたらどうか？この長い道のりの間、宿命につきまといわれ続けていると指摘するだろうか？この厳しい旅の行き着く先が、敗北と死と塵しかないことを彼女に伝えるだろうか？

ネイレルは答えのない疑問に考えを巡らせながら、悪夢が待ち構えている闇深い眠りへと落ちていった。

夜が漆黒に染まった。気温は残酷にも意図したかのようにさらに下がっていたが、目を覚ましたネイレルはまだ焚き火の側にいた。今やそこは橙色に輝く炭の巣になっていた。だが彼女は動揺した。自分以外の者がそこにいたからだ。

ありえないことに、そこにいたのはドナンだった。灰色がかった髭、あの優しい目。傷と、目尻の皺。

彼女の心は躍った。ネイレルは彼の名を叫ぶと、彼に向かって手を伸ばした。ドナンは一瞬たじろいだが、それを受け入れた。ドナンの手を取った時、驚きが全身を駆け抜けた。ドナンの指は墓地の土のように冷たかった。まるで死にゆく木の根のように、いくつもの黒い筋が曲がりながら腕を駆け上がっていた。

「それは何？」と彼女が聞いた。「病気なの？」

「何でもなし」とドナンは答えると、手を離した。乱暴ではなかったが、優しくもなかった。わずかに苛立った様子で、彼は短く鋭い動作で自分の袖を引っ張った。彼はいつもどおり歯を見せて笑ったが、まるで薄い布がかかったかのように、どこか奇妙だった。狼や肉食獣を思わせるその相貌が、ネイレルを不安にさせた。

「元気そうだな、我が友よ」とドナンはつぶやいた。「いつ以来だ？長い年月が経ったかのような気がする」



だが彼はネイレルの返答を待たなかった。その代わりに、相変わらず狼のような笑顔を浮かべながら、かつて一緒に歩いた道や訪れた場所を思い出し、お互いが別々に、そして共に成し遂げたことについて語った。その見事にまとめられた話を聞いて、ネイレルは奇妙なほど老いた気分になった。それは本当に彼女がやってきたことなのか？それほど多く戦ってきただろうか？

旅の中でそんなに多くの友を失っただろうか？そんなことを考えながら身震いし、ネイレルはその重荷に押しつぶされそうになった。

まるで彼女の思考を読んだかのように、ドナンの顔が悲しみに沈んだ。感情が変化しても彼の笑顔は完全には消えず、その表情のまま長く深いため息をついた。そして彼は頭を振ると、夜を見つめた。「そろそろ」とつぶやき、彼は続けた。「時間切れかもしれない」

「時間切れ...？どういう意味？」と彼女は聞いた。

彼は奇妙に伸びた爪で自分の髭の輪郭をなぞり、その爪に視線を落とした。それは鈍く光っていたが、血や汗のせいではなく、彼の腕の血管と同じように真っ黒だった。ドナンはまるで当然かのように小さくうなずいた。それを見て困惑したにしても、彼はそれを表情に出さなかった。それどころか、どこか満足げだった。ネイレルは迷いを感じていた。そのせいで夜がいつそう冷たく暗く感じられた。

「そのとおり」と彼は言った。「もうすべて手放すときだ。」彼は鋭く、理解に満ちた視線を彼女に向けた。「疲れないか？わかっていると思うが、戦争は戦士の生涯よりも遥かに永い。」

「私は戦士じゃない」と彼女は主張した。「私は学者よ」

ドナンは苦笑いを浮かべた。「なおさら、この旅を終わりにすべきだ」

その言葉がさらに重くのしかかり、ネイレルの体は押しつぶされそうになった。それはまるで、悪との戦いのこれまでの成果の報酬として永遠の眠りを与えるために、冷たい空気に呼ばれているかのようにだった。

「くたくたよ」と彼女は認めた。「あまりにも道が険しすぎた。」

選べるのであれば、二度とこんなことはしない」

「ならば…」

彼がそう口にした時の目の輝きに抵抗するように、ネイレルはさらに強い口調で言った。「別にできないと言ったわけじゃない」その声色は鋭く、石のダガーのように固かった。

ドナンはうなずいた。「悪は永遠だ。消えることはない。そして人間はその生涯を費やし、決して勝てない相手に立ち向かおうとする」

「私は…」と彼女は言いかけ、言葉を詰まらせた。

「これ以上できることはない」とドナンは言った。彼の羊毛のシャツの襟元からはあの黒い筋が見え始めていた。それが彼の左右の首筋を登っていく。

「何が言いたいのか？」

「我が友よ」とドナンは言った。その笑顔は疲れて悲しげだ。「これまでどれぐらい目標を果たすことができた？ 終わりのないこの旅が、空の墓の足元以外のどこに導いてくれた？」

彼女も何も言わなかった。

ドナンはかぶりを振った。「ネイレル、ゆっくりとよく考えろ。その鋭い意識を集中させるんだ。そうすれば、もう潮時だとわかるはずだ」

彼女はあっけにとられた。「潮時？ 頭がおかしくなったの？」

「いや」と彼は言った。その声は鋭さを帯びていた。「お前が見ようとしないう真実を話している」

「違う」と彼女はびしやりと言った。「そんなの受け入れられない。私たちのような人間がやらなければ、すべてが失われる」

「何がだ？ このままでは決して勝てない戦いの中で名誉と共に無駄死にするだけだ。それは勇敢と傲慢のどちらだ？」

「この戦いから逃げるわけにはいかない」

彼の中に見た闇がさらに深くなった。その目の白い部分が溶けたように見え、虹彩から色が失われると、夜鳥の羽のように黒く染まった。その口元はまだ笑っていたが、今やそこに喜びはなく、ただ残酷だった。

「ネイレル… 真実を見ろ」と言った彼の声は、人間ではなく



野獣のようだった。「お前の愛する者すべてが死ぬという真実をな」

今や闇が完全に彼を覆っていた。それは彼の目から涙のようにあふれ、その口の端から大量にしたたり落ちた。悪魔の声で彼は囁いた。「メフィストは倒せない。人間には不可能だ。当然、お前にもだ」

ネイレルはよろめきながら立ち上がった。「ありえない！」彼女は怒鳴った。「私は絶対に諦めない」

彼も立ち上がった。複雑な感情を抱きながらも、その邪悪な笑顔を歪めてやろうと、ネイレルは彼の顔面を殴りつけた。まるで煙を殴ったかのような感覚だった。その拳は彼を貫通し、ネイレルはバランスを崩した...



彼女は悲鳴を上げると同時に、悪夢から炎を上げる炭へと転がり落ちた。ネイレルは慌てて火をよけ、毛布の火種を叩いて消した。夜は広大で暗く、息を潜めていた。

そこにいたのはネイレルと岩の上のカラスだけだった。カラスはその黒い瞳で彼女を見た。彼女はうずくまり、肩で息をし、体を震わせた。彼女は激昂した。

「私は絶対に諦めない」と彼女は、傷ついたその心を奮い立たせて言った。「絶対に」

夜鳥が鳴こうとして口を開いたが、何の音もしなかった。



これでわかっただろう。

学者も女王も戦士も、自らの魂の本当の所有者ではない。知識の結果からは誰からも逃れられないのだ。誰もが自分たちがなしてきたことに苦しめられている。あらゆる選択が、我々を今ある道へと導いてきたのだ。正しさを確信した時でさえ、決断を下すたびに、それはまるで刃物のように突き刺さる。その傷口から

希望が流れ落ち、我々は純粹さを失う。傷を負うたびに、自らの肉と血が腐敗していくのだ。

そして...

一部の者はその精神をそう簡単には汚染されない。その善悪を... 誰が判断できるだろうか？

私は自分の夢... 自分の悪夢から目覚める。この目が恐怖から視線を逸らしても、私には今も見えている。私は今も理解している。言葉が私の口からこぼれ落ちる。

「何かが来る」と私は言う。そして外の木々の中で、数千の鳥が恐怖し、ざわめいている。「何か恐ろしいものが...近づいている...」

著者略歴

JONATHAN MABERRYは、Bram Stoker Awardを5回、Scribe Awardを4回、Inkpot Awardの受賞歴があるNew York Timesのベストセラー作家であり、これまでに50以上の小説を発表し、30の傑作選の編集にも携わっている。また、コミックの著者でもあり、詩人、エグゼクティブプロデューサー、執筆技術の指導者としても活躍中。『V-Wars』シリーズはNetflixのオリジナルドラマになっており、彼の小説『Rot & Ruin』は現在、Alcon Entertainmentによって映画化が進められている。また、スリラー小説の『Joe Ledger』は、『John Wick』シリーズを手がけたChad Stahelski監督の指揮のもと、TVドラマとしての放送も予定されている。ホラー、SF、ファンタジー、アドベンチャー、スレイラーなど、著作は多岐にわたる。また、International Association of Media Tie-in Writersの代表者であり、Weird Tales Magazineの編集者も務めている。著者の詳細についてはJonathanmaberry.comを参照。